



「察度王のその後」

生誕700年記念「中山王察度」特集は、これで見よいよ最終回です。

奥間大親と天女の間に生まれ、勝連按司の娘を奥さんとして、持っていた黄金で大和の商人から鉄を買ひ、それで農具を作らせて、借しげもなく人びとに分け与えたことから、中山王に推された察度の、その後はどうなったのでしょうか。1650(永暦4)年、琉球最初の正史『中山世鑑』には、ちよつと気味の悪い話が記されています。

人びとに親切な察度でしたが、中山王となった後は、思いあがった振る舞いをしてしまったようです。とても高い楼閣である「高ヨサウリ」という建物を造らせ、そこからの眺めを楽しんでいたそうです。あるとき察度は、ふざけて「高ヨサウリの上には、この私に害を加えるヤツはいない」と言いはなったそうです。さすがに天の神様も、おごり高ぶった察度を懲らしめようと考えたのでしょうか。その晩、「高ヨサウリ」の高楼で、察度は毒蛇にかまれました。そして左手を失うことになりました。

この話には、続きがあります。おそばにつかえる家来の一人が、「王様がこのまま片手では、どうして面会の儀礼や神の祭祀ができませんか。恐れながら私の手を差し上げます」と言って、左手をひじのこ

ろで切り落としました。その手を察度にくつつける治療をしたところ、見事につながったそうです。ただ、察度と家来は肌の色などが違っていたため、察度の左手は、ひじから先が黒かったということ。察度は、46年間王位について、この世を去りました。享年76歳でした。毒蛇にかまれた後、反省してよい王様に戻ったかどうかは、記録にありません。

察度の墓は、その場所について、言い伝えがないので、わかりません。

字新城出身で、戦前の民俗研究者である佐喜真興英が、調査結果を書き記したノートによると、察度の墓は、大謝名の軍花原(小字名)にあったそうです。墓の様子は、自然の洞窟地形を利用して、入口は自然石の石積みでふさいであったとあります。

軍花原は戦中の普天間飛行場の造成工事に伴い、石炭岩の山が削られました。もし佐喜真の話が正しければ、残念ながら破壊されている可能性が高いでしょう。

【問い合わせ】
市立博物館 ☎870-9317



「琉球研究」(手稿)
佐喜真興英の調査記録ノート。察度の墓の記述部分▶



「中山世鑑」
羽地朝秀が編さんした。察度の伝記部分。



「真志喜佐喜真家文書」と

レプリカ作製について

市立博物館では貴重な資料の複製品を作製し、それらを展示・公開する取り組みを行うこともあります。今年度は、その一環として、市指定有形文化財「真志喜佐喜真家文書」のレプリカを作製しました。

「真志喜佐喜真家文書」とは、佐喜真家が首里王府に提出した文書の控えで、口上覚4点、覚1点、言上写1点の合計6点あります。正確な作成年は不明ですが、18世紀後半の西年から次の戊年の間に書かれたと考えられています。内容は、「謝名のろ職」の跡継ぎに関するものです。

その当時、宜野湾間切には、野嵩・宜野湾・謝名に一人ずつ「のろ」と呼ばれる村々を宗教的に治める女性神役がおり、村の祭祀では中心的な役割を果たしていました。その「のろ」職は、特定の家筋から選ばれていたようですが、真志喜村の屋号奥間と大謝名村の蔵根がそれぞれ、「のろ」は自分たちの家が継ぐべきであると願ひ出たところ、王府は奥間家の主張を採用しました。文書には、そのいきさつが年代順に記録されています。この奥間家は「謝名のろ」を輩出した家柄であり、中山王・察度が生まれた家

でもありません。

現在、「真志喜佐喜真家文書」の実物は、部分的に害虫による破れも見られ、経年による紙の劣化も進んでいます。また、同資料は個人所有のため、普段はあまり見ることができないことから、資料保存と教育普及のため、所有者の許可を受けて二冊のレプリカを作製しました。今後、一冊は企画展や常設展示室にて展示する予定です。もう一冊は閲覧用に作製しており、研究や小学校での出前授業などで活用を考えています。普段は古文書を見る機会のない子どもたちが、実際に手に取って、その時代の歴史を感じ、学習できるよう普及に活かしていきます。

レプリカは、3月開催の「ぎのわんの字展」で展示を予定していますので、ぜひ博物館へ足をお運びください。

【問い合わせ】
市立博物館 ☎870-9317



▲「真志喜佐喜真家文書」のレプリカ



市立博物館のホームページはコチラ

